

僧侶さまの恋わずらい

目次

僧侶さまの恋わずらい

5

番外編 花乃の甘い新婚生活

257

僧侶さまの恋わずらい

一 花乃、出会う

「え、いつものお坊さんじゃないの？」

「それがねえ、加藤さんぎっくり腰やっちゃったらしくて。今年はお弟子さんが来るそうよ」

お盆が始まった、ある夏の暑い日。

精霊棚に飾る茄子の牛とキュウリの馬を作っていた私に母が告げた。

現在我が家は、毎年恒例となっている棚経の準備の真つ最中である。棚経とは、お盆の時期にお坊さんが一軒一軒檀家を訪問してお経をあげること。

現代の住宅事情では仏壇が無かったり精霊棚を作らないお宅も増えてきた。だが、仏教徒で祖父の代から一軒家に住む我が家では、毎年この時期になると仏壇の前には小さなテーブルを置き、そこに真菰のゴザを敷いてお供え物と位牌を並べた精霊棚を作る。こうして先祖の霊をお迎えする準備をするのだ。

うちにはいつも、菩提寺の住職である年配のお坊さんが来てくれていたのだけれど、ぎっくり腰では仕方がない。

「なんだ……これから加藤さんの好きな水羊羹を買いに行こうと思つてたのに。じゃあ何買つてき

たらいいんだろう？」

「代わりに来るのお弟子さんみただし、何でも食べてくれるわよ」

私は茄子とキュウリの牛馬を母に渡し、よいしょと立ち上がる。

「お弟子さんって、若いの？」

「六十代後半の加藤さんよりは若いんじゃないの？」

「まあ、そうよね……」

仏壇を掃除しながら、母が「ほら、早く買いに行け」とばかりにしつしつと手を振る。

「もう。分かったわよ、行つてくる」

お坊さんが来る時間まであと三時間ほど。私は鞆と日傘を持って、足早に家を出た。

到着した百貨店は、最近始まった夏物セールで随分と賑わっていた。時間があればゆっくり見たところだけど、残念ながら今日はそういった余裕はない。

後ろ髪を引かれつつ、混み合うデパート地下のお菓子売り場へ向かった。

お盆時期ということもあり、お菓子の種類は充実している。

加藤さんは毎年いらっしやるから、どんなものが好きか何となく分かる。でも、年齢すら分からないお弟子さんの好みとなると、さっぱりだ。

いろいろと悩んだ末、私は小ぶりの葛饅頭と水羊羹を買った。

葛饅頭は見た目も涼しげだし、喉越しもいいから食べやすいだろう。

棚経に来てくれるお坊さんは、たくさんのお家の檀家さんのお宅で何かしらご馳走になっている。だか

ら、お茶菓子の量は控えめで、お腹が冷えすぎないものがいいらしい。

なんせお坊さんは出されたものを残せないからね。

水羊羹みずようかんのほうは、ぎっくり腰の加藤さんへのお見舞いだ。

百貨店からの帰り道、日傘をさして住宅街を歩いていると、原付に乗ったお坊さんが私の横を通り過ぎた。

「ほんと、この時期は忙しそうね……」

お盆とはいえ、父も弟も仕事が忙しく休みが取れなかった。そのため今日は、シフト制で比較的融通の利きやすい私が仕事を休み、母を手伝うことにした。必ずしも柵たてかきに二人以上いなきやいけない決まりがあるわけじゃないんだけど、母が「せっかく来てくれるのに私一人でお経聞くのも寂しいじゃない!」と言うもんだから。

葛原花乃くずはら。二十九歳独身、彼氏なし実家暮らし。これといって没頭している趣味もなければ特技もない。隣町にある洋食店で働きながら平凡な毎日を過ごしている。

同い年の友達がどんどん結婚して出産していく中、未だ独り身で若干肩身の狭い私はこんな時くらい家族に協力しなくては。とはいえ、特に結婚を焦っているわけではない。仕事をしながら平穩に自分のペースで生きていければいいと思っていた。

この時までは。

家に戻ってきた私は、仏間の掃除に追われる。

そんなにももの凄く綺麗にする必要はないんだけど、やっぱり仏間に身内以外の人が入る機会ってなかなかないから、これを機にと思ってせっせと掃除をした。

「花乃。お坊さんもうすぐいらつしやるから。名前は確か……支倉はせくらさん。インターホン鳴ったら出てよ?」

「はいはい」

すでにお坊さんを迎える用意はできている。

精霊柵しょうりょうさくの準備も終えたし、仏間は掃除をした後エアコンをつけて涼しくしてある。おしぼりは冷蔵庫で冷やしてるし、お茶菓子も支度済みだ。あとは支倉さんとやらが来るのを待つばかり。

しかし、予定の時刻が過ぎてもインターホンの鳴る気配はない。おやつと思っていると、我が家の固定電話が鳴った。

「はいはい」

母が電話に出ると、相手は例のお坊さんのようだ。どうやら、迷ってしまったらしく家の場所を確認する電話だった。

ざっくりと説明し受話器を置いた母は、私のほうへくるりと振り返る。

「花乃、外に出て支倉さん案内してあげて。近くまで来てるみたいだから」

「はい……」

家の前に出て、キョロキョロと周りを見渡す。だが、近くにそれらしき人は見当たらない。

——もしかして、一本、通りを間違えたのかな。

そう思った私は、少し広い通りまでサンダル履きのまま出てみることにした。ちょっと近道して、細い路地から角を曲がるうとした瞬間、目の前をスツと影がよぎる。

「わっ!!」

「おっと」

出会い頭かしらに人とぶつかりそうになり、咄嗟とつきに避けようとしてバランスを崩してしまった。そんな私の腰を、相手の男性が片手で支えてくれる。

「ごっ、ごめんなさいっ!」

「申し訳ありません、大丈夫ですか」

その声に、私の背中がゾクリと粟あわた立つ。

低くて、少し甘い優しい声――

私の目の前には、下の白衣が透けて見える黒紗くろしやの法衣と、茶色の輪袈裟わげさを身につけた男性の広い胸がある。はっとして顔を上げると、すつきりとした短髪に、やけに綺麗な顔をした僧侶が私を見下ろしていた。

「……は、支倉……さん、ですか?」

「はい、支倉です。あ、もしかして葛原さんでしょうか?」

「そうです」

私が答えると、その人はほっとしたように表情を綻ほたつばせた。

「よかった。一本、道を間違えてしまったようですね。では、これからお伺うかがいします」

そう言って微笑んだ支倉さんに間近から見つめられて、私の心臓がおかしな音を立てる。

「お、お願いします。ところで……あの、腰に手が……」

もう危険は回避したはずなのに、何故だか支倉さんの手は私の腰を支え続けている。

「ああ、これは失礼いたしました」

全然そう思っていないさそうな笑みを浮かべて、静かに彼の手が離れていった。だけど、彼自身は私のすぐ側に立ったままだ。

なんだろう、この人。悪気はないのだろうか……やけに距離が近い気がする。

動揺して立ち尽くす私に、微笑んだ支倉さんが声をかけてきた。

「葛原さん? 参りましょう」

「は、はい。こちらです……」

……きつと気のせいね。支倉さんがあんまりにも綺麗な顔をしてるから、びっくりして動揺したんだ。しつかりしろ、私。

家に着くと、支倉さんは出迎えた母に丁寧あいさな挨拶をする。たちまち目をキラキラさせた母が、支倉さんを仏間に案内していった。私もその後が続く。

支倉さんは持っていた黒い鞆かばんを開き、中から鈴と木魚のようなものを取り出す。そして精霊棚しやうりやうたなの前に正座をすると、私達が座るのを待って静かに読経よきやうを始めた。

しかしさっきのアレは、なんだったんだろう。

柄がらにもなく初対面の男性にドキドキしてしまった。しかも相手はお坊さんだというのに……

綺麗な顔立ちのせい？ それとも間近で見つめられたから？ もしかして、腰を触られたせい？  
ありがたい読経よきょうの最中だというのに、私の頭の中は煩惱ぼんのうでいっぱいだ。

しかし、良い声だなあ……

いつも来てくれる加藤さんも、落ち着いた素敵な声をしている。でも、支倉さんの声はうっとり  
するほど綺麗な低音で、凄く艶つやがあった。

まるで心地いい音楽を聞いているような気持ちになつて思わず聞き惚れてしまう。

どれくらい時間が経つたのか。リーンと高い鈴ねの音が聞こえて、我に返る。

気づくと読経よきょうは終わっていて、振り返つた支倉さんが頭を下げた。

「ありがとうございます」

その声にハツとして、私は急いで立ち上がる。

キッチンに行き、お茶の準備をする。その間、心得たように母が支倉さんの話し相手となつてく  
れていた。それにしても、母の声はやけに華やいでいる。

——お母さん、支倉さんがイケメンだから嬉しそうだな……

そんなことを考えながら手早くお盆に煎いれ立てのお茶とお茶菓子、冷たいおしぼりをのせて仏間  
に戻つた。そこにはすでに小さなちゃぶ台が用意されていて、上機嫌な母の声が響いている。

「まあ、じゃあ将来は実家のお寺を継がれるんですか？」

「そうですね。たぶんそうなると思います」

私が支倉さんの前にお茶を置くと、にっこりと会釈えしやくされた。

つられて私も笑顔で会釈する。

「支倉さんて、今おいくつ？」

唐突な母の質問に、支倉さんは穏やかに三十一ですと答える。

「じゃあもうご結婚はされているのかしら」

「いえ、独身です。なかなかご縁が無くて」

少しはにかみながら、彼は葛くず饅頭まんじゅうに竹楊枝たけようじを刺して少しずつ口に運んだ。

そんな支倉さんの手に、私はつい目がいつてしまう。

綺麗な手だな……。指が長くて、ちよつと骨ばつてて。なにより所作が美しい。

気づくと、彼の手の動きをじつと目で追っていた。

「あら、じゃあうちの娘なんてどう？ 二十九で彼氏もないし。顔立ちだつて悪くないのに、  
ちよつともご縁が無くてねえ……そろそろお見合いでも思っていたのよ」

思いがけない母の言葉に、カアツと顔が熱くなる。私は、隣にいる母を睨にらみつけた。

「ちよつとお母さん!! 何、いきなり。そういうことはご迷惑だから、やめてよ!」

私が割り込むと支倉さんは、「いえ、そんなことは決して」と言つて優しく微笑んだ。

ここでタイミングよく、家の電話が鳴る。これ幸いと私が立ち上がるうとすると、何故か母に止  
められた。

「私宛かも! ちよつとごめんなさい! 花乃、お相手してて」

勢いよく立ち上がった母は、少し慌てぎみに仏間から出て行つてしまう。

私は母が出て行った襖を見つめたまま、しばし茫然とした。

「ええー、ちよつと、このタイミングで二人きりにしないでよ。……どうしよう、一体何を話せばいいわけ……」

「花乃さん、と仰るのですか」

困惑して言葉が出てこない私に、支倉さんが静かに声をかけてきた。

「あ、はい」

「どのような漢字ですか？」

「植物の花に、乃……って分かりますか、こう……」

指でちやぶ台に乃の字を書くと、支倉さんは理解した様子で「ああ」と頷いた。

「素敵なお名前ですね。貴女にぴったりだ」

「あ、ありがとうございます……」

きつと気を遣ってくれているのだろう。ちよつと申し訳なく思いながら会釈をした。

「先ほどの話ですが」

「はい？」

先ほどの話ってなんだ？

支倉さんが優しい笑みを浮かべながら私を見つめる。

「お付き合いをされている方は、本当にいらっしゃらないのですか？」

そこ、突っ込んできますか。

「……ええ、まあ」

「世の中の男は見る目がありませんね。こんなに綺麗なのに」

「……………」

あまりにストレートな褒め言葉に思わず固まる私。

この人、よくこんな恥ずかしいこと面と向かって言えるな。こっちが照れるんだけど……

「き、綺麗かどうかはさておき、なかなか縁が無くて。それに、こういうことは自然に任せようと思っっています」

話している間、支倉さんはずっと私から視線を逸らさなかった。

そんななじつと見られると、落ち着かないのですが。なんか……今すぐ洗面所の鏡で自分の姿を確認したくなってくる。

「……大丈夫かしら。私、どっか変なところもある……？」

「そうでしたか、ならばこれも縁でしょうか」

私をじつと見つめていた彼が、そう言って笑みを深めた。

「え？ 何がですか？」

支倉さんが何を言いたいのかわく分ならず、彼の顔を凝視する。彼も何故か私の顔をじつと見つけた。

その時、電話を終えた母が、パタパタと小走りで仏間に戻って来る。

「途中でごめんなさいねえ。娘、ちゃんとお相手してました？」



「はい。楽しくお話しさせていただきました」  
支倉さんが母にっこりと笑みを向けた。

「どこが楽しく？」

疑問に思いながら、黙って母と支倉さんの会話を聞いていると、ふと支倉さんが腕時計に目をやった。

「ああ、楽しくてつい喋りすぎてしまいました。次に行かねばなりませんので、これにてお暇いたします」

そう言うと深く頭を下げ、支倉さんは立ち上がる。

玄関に向かう支倉さんの後を母がついていく。その後ろ姿を見送っていたら、ふと加藤さんへのお見舞いを渡すのを忘れていたことに気づいた。急いでキッチンに戻り紙袋を掴むと、私は小走りで玄関に向かった。

「あ、すみません、これ……」

支倉さんに紙袋を渡そうとしたら、横から母の声が飛んできた。

「花乃、支倉さんお車でいらっしやってるそうだから、そこまでお見送りしてあげて！」

「……………はー」

こういう時、母の命令は絶対だ。私は紙袋を持ったまま家を出て、彼が車を停めている近所のコインパーキングまで、支倉さんと並んで歩く。

「車でいらしてたんですね……」

「さすがに徒歩で全てのお宅を回るのは、時間がかかってしまいますからね。バイクの日もありますけど、今日はお伺いするお宅の範囲が広がったので車にしました」

私の何気ない呟きにも、いい声で、丁寧な答えが返ってきた。

「今の時期はやっばりお忙しいんですか？」

「そうですね、かなり……。特に今年は就職が回れないこともあり、いつも以上の忙しさですね」

「そうなんですか……大変ですね……」

毎年加藤さんも忙しそうだったけど、今年はその加藤さんが動けないんだから余計に大変だよな。「花乃さんは普段どういったお仕事をされているんですか？」

今度は逆に質問された。

「隣の、老舗の洋食店で働いています」

「なんというお店ですか？」

間髪を容れず、支倉さんが聞き返してくる。

「革亭っていう店ですけど……」

「ああ、聞いたことがあります。あの辺りにも檀家さんがいて、その店のオムライスが美味しいと仰っていました」

「あ……ありがとうございます。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください」

「はい、ぜひ」

当たり障りのない会話をしながら歩いていたら、コインパーキングが見えてきた。支倉さんが鍵

を取り出すと、ハイブリッドのセダンがピピ、と音を発する。

これでようやくお役御免だとばかりに、私は支倉さんに持っていた紙袋を差し出した。

「これ、加藤さんの好きな水羊羹みずようかんです。よかつたら皆さんで召し上がってください」

支倉さんの視線が、紙袋ではなく私に注そそがれる。彼は紙袋を差し出した私の手を、大きな手で包み込んだ。その行動の意味が分からなくて、私は一瞬頭が真っ白になる。

「へっ？ ああ……」

「花乃さん」

彼の声のトーンが少し低くなったような気がする。見上げると、支倉さんが射抜くような眼差しを向けてきた。

「貴女さえよければ、本気で考えていただきたい」

「え、何を……」

「私の妻になることを」

思いがけない突然の言葉に、私の思考が停止した。

「……………つま??」

「……は、支倉さん、いきなり何を仰おっしゃってるんですか?」

まるで状況が理解できない私は、なんとか平静を装まもい支倉さんから視線を逸そらした。しかし、包まれた手を通して伝わってくる支倉さんの熱に、変な汗が出てくる。

「ここで出会ったのも何かのご縁。私はこの出会いが意味の無いものとは思えない」

支倉さんが、じり、と私との距離を詰めてきた。

「すぐにどうこうとは言いません。ただ、私との未来を考えてみてくださいただけませんか」

「そ、そんなこと急に言われても困ります！ 大体、今日お会いしたばかりの方と、いきなり結婚なんて無理です！」

私の言葉に少し冷静さを取り戻したのか、支倉さんがふっ、と笑った。

「……そうですね。貴女お嬢さんが仰おっしゃる通り、いきなり過ぎました」

そう言いながら彼は一歩後ろに退ひいた。私の手から掌てのひらを離し、代わりに紙袋の持ち手を掴つかむ。

「すみません、驚かせてしまつて。でも——」

紙袋を受け取る間際、彼の長い指が私の手の甲を、つ、と撫なでた。

予期せぬ接触到、私の胸がドキンと跳ねる。

「先ほどの言葉に嘘はありません。お土産みやげをありがとうございます。では、また」

きつぱりとそう言い放った彼の表情は、なんだかとても嬉き々としたものに見えた。大袈裟おおげさかもしれないけど、まるで宣戦布告されているような気になる。

茫然ぼうぜんと突つつ立ったままの私をその場に残し、支倉さんの乗った車がコインパーキングから出ていく。私の横を通り過ぎる時、それはそれは綺麗な笑みを残して。

「……いまのは、なに？」

## 二 花乃、逃げる

「葛原さん、どうした？」

店長に声をかけられた私は、ハッと成って我に返る。

いけない、仕事でだ……！

老舗の洋食店、菓亭のランチタイム。いつもなら誰より忙しく動き回っている時間帯だというのに、私は空を見つめたままぼーっとしていたようだ。

「すみませんっ、何でもありません」

慌てる私を不思議そうに見ながら、店長は出来上がったオムライスをカウンターに置いた。

「珍しいねえ……葛原さんがぼーっとするなんて。何かあった？」

「い、いいえ！ 何もないですよっ!? 行ってきます」

オムライスの皿を手に取り、私は笑顔を取り繕ってカウンターを離れた。

すみません店長。何もないどころか、大ありです！

そう、あれは一週間前の出来事。

なんと、会ったばかりの人に、いきなりプロポーズされたんです。あんなの、動揺しないほうがおかしいでしょう。しかも相手は美形のお坊さん……

もう、一体何に突っ込んでいいやら分からない。支倉さんと別れた後、魂が抜けたみたいに何も頭に入らず、そのまま一日を終えた。

それから数日は何事もなかったけれど、頭が冷静になってくると、徐々に疑問が浮かんでくる。

支倉さんは結婚に縁が無いと言っていたけれど、あれだけ格好よかったら、絶対に周りが放っておかない。きつとたくさんの縁談が来ているはずだ。

それなのに何故、会ったばかりの私にプロポーズ？ それこそ、意味が分からない。

まるで狐にでも化かされた気分だ。

とはいえ、お盆が終わればお坊さんに会う機会など滅多にないし、会わなければ支倉さんだって私のことなど忘れるでしょう！

なーんて思っていた私に、今日母が、衝撃の事実を告げた。

『あ、花乃。来月お祖母ちゃんの三回忌だからね。お盆の時にちゃんと支倉さんをお願いしていたから。加藤さんの腰もその頃はおそらく大丈夫だろうけど、自分もお手伝いしますって言ってくれたわ』

その話を聞いた瞬間、ガツン、と頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けた。

別れ際に、支倉さんが口にした言葉を思い出す。

——では、また、って……そういうことだったのか……！

一体どんな顔をして会えばいいのか考えると、私は途端に滅入ってくる。つい、ため息をついてしまうと、店長が心配そうな顔で近づいてきた。

「本当に大丈夫かい？ 具合が悪かったら奥で休んでれば？」

店長は五十代半ばの温厚な人だ。先代が始めたこの店の味を二十年近く守り続けている。

そんな店長と私は、学生時代のアルバイト以来、そろそろ十年の付き合いになる。

「だつ大丈夫ですよ！ 先日ちよつといろいろあつて、疲れただけなんで」

だめだ、こんなことで店長に心配をかけてはいけない。

「ならいいけど。看板娘の葛原さんが元氣ないなんて知ったら、葛原さん目当ての常連さんがみんなすつ飛んで来ちゃうよ？」

「やだ、店長ったら。そんなわけないじゃないですかー」

「いや、気づいてないの葛原さんだから……」

店長が何故か苦笑したため息をつく。

まあ、目当てかどうかはさておき、確かによく話しかけてくれる常連さんは多い。だけど、そこから恋愛に発展するかというと……そんなことはなかったりする。

でも、今回のは今までと何か違う。

『妻に』なんて言われたのは、生まれて初めてだ。

もの凄い直球ストレート。それも豪速球だ。

そりゃ、凄くイケメンだったし、声も良くて、体型だってスラッとして背も高かった。そんな素敵な人に妻になってくれ、なんて言われたら決して嫌な気はしない。

かといって結婚するかと問われたら答えはノーだ。

相手がどんな人かも分からないし、まして会ったばかりなのに、結婚なんてできるわけがない。

それに……お坊さんでしょ。正直なところ、お寺や仏教やお坊さんについてなんてよく分からないし。イメージとして厳しい世界という印象もある。私には無理だよ、きつと……

「……うん。ちゃんとお断りしよう」

どうして支倉さんが私を気に入ってくれたか分からないけど、彼だって結婚するならしつかりと自分を理解してくれる人のほうがいいに決まってる。

「よし、仕事しよ……」

頬をばちばちと軽く叩き、気持ちを入れ替えた私は再び仕事に戻った。

そして迎えた、祖母の三回忌。

あんなに悩んでいたくせに、ここ一週間くらいはすっかり支倉さんのことを忘れていた。今日になつてまた思い出し、にわかには緊張する。

会ったらちゃんと、お断りする——そう心に決めて、私は家族と一緒に家を出た。

うちの菩提寺ぼだいじであるこのお寺は、そこそこの歴史のある大きなお寺だ。大きな山門さんもんから覗くのぞ本堂は立派で、そこに安置されている御本尊は秘仏ひぶつとなっている。

今日は休日ということもあり参拝客もちらほら見えた。

喪服に身を包んだ私達は控え室に通され、法要の始まる時間までお茶を飲んだりして待つことになる。

「姉貴、なんかソワソワしてねえか？」

弟の佑が湯呑にお茶を注ぎながら、私に疑惑の視線を送る。ちなみにお茶はセルフサービスだ。私は一瞬ビクツとするもなんとか平常心を装った。

「し、してないし。久しぶりのお寺だから緊張してるだけ」

佑はふーん、と言ってお茶菓子に手をつけるが、表情はまだ訝しげだ。

「何か朝から様子がおかしいんだよなあ」

「気のせいよっ」

くっ、佑。何故こんな時ばかり鋭いんだ……

「頭の後ろ、髪ほつれてるぞ。トイレで直してきたら」

お茶菓子の袋をビリビリと破きながら、佑が私の後頭部を指さした。

「えっ、ほんと？」

頭を手を持っていく。今日は背中のみん中まであるストレートの髪をハーフアップにしてきたのだが、いつの間にか乱れていたようだ。

法要が始まるまでもう少し時間がある。私は、髪を直すために一人で控え室を出てお手洗いに向かった。

廊下を足早に進んでいると、後方から聞き覚えのある声に話しかけられて、肩が跳ねた。

「こんにちは」

すぐに誰なのか分かった。けれど、何故か金縛りにあったように体が固まってしまい、後ろを振

り向けない。

「お久しぶりですね、花乃さん。あれから貴女のことを忘れた日は一日もありませんでしたが……

貴女は？」

支倉さんが私に問いかける。

まさかこんなところで会っちゃうなんて……!! どうしよう……

ちゃんと断ると決意してきたものの、いざ彼を前にすると戸惑ってしまう。

だが、このまま逃げ出すわけにもいかないので、私はおそるおそる背後を振り返った。すると、法衣に身を包んだ支倉さんが私に向かってニコリと微笑む。

その綺麗な笑みに怯みつつも、私は意を決して口を開いた。

「お、お久しぶりです……あの、支倉さん、私……貴方にお話が……」

「お手洗いを、お探しますか？」

あ、そうだった。うう……せっかく勇気を振り絞って話を振つたのに……

出鼻をくじかれた形になってしまいガツクリするが、当初の目的を思い出した。今は彼とゆっくり話をしている場合ではない。

「ええ、ちよっと、髪を直しに行こうと思って……」

「ああ、それでしたら私が直して差し上げますよ」

私の返事を聞いた支倉さんが、すっと後ろに回り込んだ。

「え、いいです。自分でやりますから」

「もうすぐ法要が始まります。結い直すより、ピンで留めたほうが早いですよ」  
そう言うのと、彼の指が慣れた手つきで私の髪に触れた。

うっ……なにこれ!! 心臓の跳ねっぷりがヤバイんですけど……! いや、動揺してる場合じゃない。今言わないと、もうチャンスは無いかも……!

私は覚悟を決めて、再び切り出した。

「あの、支倉さん、先日のお話なんですけど……」

「……貴女が言いたいことは、おおよそ見当がつかます」

静かに支倉さんが口を開いた。

支倉さんは私の髪からピンを抜くと、指で整えた髪に再びピンを挿す。

「差詰め、『先日のお話は無かったことに……』といったところでしょうか」

「え」

「申し訳ありませんが、その言葉は受け入れられませんね」

そう言うって、彼の指が優しく私の髪を梳いてくる。くすぐったくて、こそばゆくて、何故か体が熱くなった。

「……どうしてですか」

動揺しつつも、私は必死で平静を装い彼に尋ねる。すると彼の気配がより近づき、私の耳のすぐ横で甘い低音が響いた。

「私は貴女と結婚したいので」

みつ、耳に息がかかった……!! わざとだ、絶対わざとやってるこの人……!!

彼の息がかかった耳に咄嗟に手を当て、私はなんとか声を出す。

「で、ですから! 急にそんなことを言われても困ります」

「それではせめて、私のことを知ってから判断していただけませんか?」

支倉さんの手が、髪から私の肩にするりと移動した。

「私を知っていただく機会なら、幾らでも作りますよ」

彼の手が触れている肩が、意思を持ったように熱を持つ。気持ちとは真逆の反応をする自分に動揺し、居たたまれなくなってしまう。思わずギョツと目を瞑った。

背後にいる彼のことを意識して、さっきから胸のドキドキが止まらない。

もう、この状況無理……!!

思いきって振り返ると、優しく微笑む支倉さんと視線がぶつかった。

「……もうすぐ法要が始まります。控え室にお戻りください」

そう言い残して、支倉さんは衣擦れの音と共に去っていった。

ド、ドキドキし過ぎて心臓が破裂するかと思った……

胸に手を当てて深呼吸を繰り返す。

あの人を相手にするとどうも調子が狂う……言いたいことが全然言えなかった。

うるさい心臓をなんとか落ち着かせて控え室に戻ると、私の顔を見た佑に「なんで顔真っ赤なの?」と不思議そうに言われた。

うう……お祖母ちゃんごめんね。ほとんど読経が頭に入らなかつたよ……

あの後、すぐに三回忌の法要が始まったんだけど、読経の際、住職の加藤さんだけでなく、支倉さんまで現れたから、私は静かにお経を聞くどころじゃなくなりました。

支倉さんはもう一人のお弟子さんと中央を向いているので目が合うことはなかつただけ……私は顔を上げることができなかった。

読経の後、お墓参りと卒塔婆の供養を行い、私達は会食にあたる、お斎のためにお寺の中の広間へ移動した。集まった三十人程の親族が、それぞれ用意された席に着く。最後に読経をあげてくれた住職の加藤さんが祭壇側の上座に着席する。

私は周囲を見回し、支倉さんがこの場にいないことに心底ほつとした。会食が始まってしばらく経つと、私の両親と叔父が住職と和気藹々と談笑しているのが目に入った。

はっ、よく見たら叔父さん、お酒入ってない？

うわ……叔父さんお酒入ると、要らんお喋りを始めるんだよ……

なんて思っていたら、叔父とぼつちり目が合ってしまった。

「そーいや花乃はまだ結婚しないのか」

ほらきた……お酒飲むといつもこれだよ……

「叔父さん。お酒飲む度にそれ聞くのやめてよ。こんな席で……」

ウンザリしながら、叔父を軽く睨みつける。だが、そんな苦情など気にもかけず、叔父は滔々と話し続けた。

「おばあちゃんの一周忌の時、付き合ってる相手がいるって言ってたじゃないか。その彼はどうか？」

ぐっ！……あの時も相当お酒入ってたくせに、そういうことはちゃんと覚えてるのね……

「残念ながら、とつくに別れました……！」

「なんだ別れたのか。お前もうすぐ三十だろ？ 俺の会社の若いヤツ紹介してやろうか？」

「結構です」

私と叔父の会話にさりげなく耳を傾けていた父が、ここで口を開いた。

「花乃は結婚したくないのか？」

まさか父まで参戦してくるとは……

「そ、そういうわけじゃないけど、私は今の生活に満足してるから！」

「でもなあ……」

「ほんとに！ 私のことより、佑のことを心配して」

「なんで俺!？」

矛先を弟に向けて、何とかその場をやり過ごす。

どうやら叔父さんは、会社で紹介したい若い子がいるみたいで、お酒が入ると毎回この流れになるのだ。本当に勘弁してもらいたい。

そんなこんなで、ぼちぼちお斎もお開きになりそうなので、私はすいているうちにと、トイレに立った。

——精進料理は美味しかったけど、いろいろあつて疲れた。もう、早く帰りたい。

ハンカチで手を拭きながらトイレを出ると目の前に支倉さんがいて、驚きのあまり飛び退いた。彼は腕を組んで壁に凭れ、□元に笑みを浮かべている。

「っ!! なっ!!」

なんでここにっ!?

「本日はお勤め御苦労様でした」

驚きに目を丸くする私に構わず、支倉さんは壁から背を離すと丁寧に一礼した。彼は先ほどまでの礼装ではなく、略装に着替えている。

「いえ、こちらこそ。ありがとうございます」

何とか平静を装って私も礼をすると、支倉さんは優しく微笑んだ。

「弟さんがいらっしやるんですね。貴女とよく似ていらっしやる」

「そうですか? 自分ではよく分からないんですけど」

「……この間の薄いブルーのワンピースも素敵でしたが、喪服もとてもお似合いですね。このまま私の部屋にさらってしまいたいくらいです」

「……は……?」

□元に不敵な笑みを浮かべた支倉さんがそんなことを言うもんだから、また顔に熱が集中してし

まう。

「変なこと言うのやめてください。支倉さんは、いつもそんなことを檀家の女性に言っているんですか?」

「おや、心外ですね。私がこんなことを言ったのは貴女が初めてですよ」

支倉さんは本当に心外そうに少し肩を竦める。嘘ばかり……

「それはどうでしょう。これまでも、女性とお付き合いされてきたでしょう?」

絶対この人経験豊富に違いない、と思つて鎌をかけてみた。

「はい」

やっぱり。意外にあつさり認めたな。

「しかしながら、自分から望んでお付き合いした女性は一人もいません。これまでは全てあちらから来てくださったので」

なにそれ! 超モテモテじゃないの!!

思わずため息が零れてしまう。

「だったらなおさら……」

「なので、自分から女性にアピールするのは実は初めてなのです。正直、加減がよく分かりません。花乃さん。どうしたら私の本気だと分かってくれますか?」

「……………」

そんなこと言われても分かんないし。



口をきゅつと真一文字に結んだまま、私は黙り込んだ。そんな私を支倉さんは少し困ったように覗き込んでくる。

「何も仰つてくれないのですか？」

「わ、分からないんですよ！ 私だってこんな状況、初めてですから」

私の答えに対して、支倉さんは口元に手を当てて何やら考える仕草をした。そしてチラリと私に視線を向ける。

「貴女が許可してくれるなら」

「なんです？」

「抱き締めてもいいですか？」

「はっ!？」

突拍子もない申し出に思わず目を丸くした。でもすぐ彼の要求を理解し体が熱くなってくる。

「……そんなのっ！ 却下します!!」

私はぶんぶんと首を横に振りながら彼を睨みつけた。だけど支倉さんは表情を変えない。

「じゃあキスは？」

「あつ、ありません!!」

間髪を容れず即答した。

私の返事にくっくっくつ、と肩を震わせて笑う支倉さん。

「金城鉄壁とはまさにこのこと。花乃さんを口説き落とすのは一筋縄ではいかなそうですね」

そう言いながらも、彼の態度からは余裕が感じられる。

私がいる理由をつけて断つても、きつと支倉さんのペースに持っていかれるに違いない。そんな気がする……。やだ、逃げたい。もう帰ってもいいかな。

「すみません、私そろそろ戻ります」

支倉さんから目を逸らし、お斎の会場に戻ろうと踵を返したところで、いきなり腕を掴まれた。

「え！ なにす……」

「事前に許しを請うと断られるので、いささか強引な手段に変更致します」

耳元で囁かれたと思ったら、あつという間に私の体は支倉さんの腕に包まれていた。

「っ!!」

「……どっ、どうしよう！ 私、抱き締められてる……!」

この状況を自覚した瞬間、私の体は石のように固まってしまった。

「柵経の目、よろけた貴女を支えた時とも思いましたが、細いですね」

そう囁きながら、彼の掌が私の背中を優しく撫でる。壊れ物を扱うような手つきに、身を任せそうになってしまった。しかし、今はそれどころではない。

「はっ……離してください!!」

私は彼の腕から逃れようと身を振る。

「貴女に、私の胸の音が伝わりますか？」

そう問うた後、彼は私の頭を自分の胸に優しく押しつけた。私は一瞬抵抗を忘れて支倉さんの胸

元に耳を当てる。

「……………あれ、結構ドキドキしてる？」

思わず、支倉さんの顔を見上げたら、彼と視線がぶつかった。

「……………本当に、なんて可愛らしい……………」

「え」

「このまま、貴女を私のものにしてしまえたら……………」

支倉さんが蕩けるような眼差しで私を見つめながら、絞り出すように呟いた。

そのとんでもない呟きに一瞬間まってしまった私は、すぐに我に返る。

「なっ、何言ってるんですか!! お、お坊さんがそんなこと言っつていいんですか!？」

「僧侶だって人間です。少なくとも、うちの宗派で恋愛は禁忌ではありません。私の両親も恋愛結婚ですし」

しれっともつともらしく言われ、こっちは何も言い返せない。その隙に支倉さんはさらに私を包み込む腕に力を込めた。

——なんかこれ、ヤバくない？ は、早く離れなければ……………!!

「は、離してください!」

身の危険を感じ、腕に力を入れて支倉さんを押しやるも、支倉さんはびくともしない。

「花乃さん。私との結婚を真剣に考えてくださいませんか」

「もう、からかうのは止めてください」

こんな超イケメンで今まで女性に苦労したことなどなさそうな人に、平穩な私の日常を引つ掻き回されるのはご免蒙りたい。

「私は本気です」

「いつ、嫌です!!」

そう言った瞬間、私を抱く支倉さんの腕の力が緩む。

気がついたら、私は両手で支倉さんを強く突き飛ばしていた。

「……………もうっ、二度と私の前に現れないでください」

驚いたように立ち尽くす支倉さんに、これ以上ないくらいはつきり告げる。

そのまま私は踵を返し、振り返ることなくお斎会場に戻った。そして、引つたくるように自分のバッグを手にする。

「私、歩いて帰るからっ」

突然戻ってきた私の剣幕に驚き、キョトンとしている家族へそう宣言し、私は逃げるようにお寺を後にしたのだった。

### 三 花乃、讓歩する

——はあ……………

もうすぐ鬼のように忙しいランチタイムが始まる。呑気<sup>のんき</sup>にため息なんかついている場合ではないと分かっているのだが、どうもここ最近、私の気分は下降する一方だ。

「葛原さん……最近ため息が多いけど、何か悩みごとでもあるの？」  
そんな私を近くにいた店長が心配してくれる。

「……店長……人間誰しも失敗することってありますよね……」

私は遠くを見つめながら、店長に同意を求めた。

いきなりそんなことを言われた店長は、ちよつと困惑した顔をしている。

「そりゃあ、ねえ。……もしかして葛原さん何か失敗でもしたの？」

「……まあ、ちよつと……」

コーヒーカーップを拭きながら、また一つため息を落とす。

あれから一週間が過ぎた。

支倉さんに突然抱き締められ再び求婚された私は、動揺した勢いでかなり酷い<sup>ひど</sup>ことを言ってしまった。

でも時間と共に、少しずつ冷静さが戻ってくると、さすがにあれは言い過ぎたかもしれないと自己嫌悪<sup>おちい</sup>に陥る。

支倉さんにも、確かに行きすぎたところがあったと思う。それでも、あんな風に頭から拒絶しなくてもよかつたのではないか……

そう思うとキリキリと胃が痛んでくる。

……いやいや、別に好きでもない人にどう思われたっていいじゃない。何度もそう思うようにしても、やっぱりどこか気分が晴れないのだ。

あんな捨て台詞<sup>ぜりふ</sup>、言わなきゃよかつた……

「葛原さん……本当に大丈夫？」

店長がまた私を見て心配そうに呟<sup>つぶや</sup>いた。

「すみません……もうすぐ上がりなんで、今日はさっさと帰って休みます」

「よく休んで、早くいつもの葛原さんに戻ってよ？」

「……はい」

ほんと、戻りたいです……

勤務を終えた私は、のんびりと商店街を散歩しながら帰ることにした。

太陽が沈みつつある夕方六時。昼間の暑さが少しおさまり、吹く風もどことなく心地いい。

私は落ち込んだ気分を変えようと、お気に入りの洋菓子店のプリンを買って帰ることにした。その店のプリンは今流行<sup>はや</sup>りのとろっとしたクリーミーなプリンではなく、昔ながらの弾力のあるプリンだ。甘さも控えめで、下の方にあるカラメルソースと一緒に食べると甘さとほろ苦さとの加減が絶妙<sup>おおい</sup>の美味しさなのだ。

そのプリンを無事にゲットして、再び帰路につく。

しかし支倉さんに対する罪悪感と、このいまいちすっきりしない気持ちは一体どこから来るのか。ちよつと考えたくらいでは、その答えは見つからなかつた。

ま、いいか……考えても分からないことは仕方がない。今日はこれ食べて早く寝よつと。気持ち切り替えて、やや気分が浮上した私はいつもと変わらない調子で自宅のドアを開けた。

「ただいま……」

家のドアを開けて玄関に入った私は、そこにあるはずのないものを見つけて立ち止まった。狭い玄関に綺麗に揃えて置かれているのは、まさかの草履――

まさか……まさか、まさか……！

「あつ、花乃！ 支倉さんがいらしてらるわよ」

廊下の向こうから母がパタパタとスリッパを鳴らしてやってきた。

やっぱり!!

「……な、なんで？ なんでうちにいるの……？」

私は玄関に立ち尽くしたまま、やつとのもので喉から声を絞り出した。

「あんたが三回忌の時にお寺に落としたハンカチをわざわざ届けてくださったのよ。ほら、早く客間に行ってお礼を言っなきゃさい！ 私は、スーパールのタイムセールに行くところから、後は頼んだわよ！」

母は私にハンカチを手渡すと、足早に家を飛び出していった。

「……………嘘でしょ…………」

私は玄関の上がり框かまちに手をつけて、がくりと項垂うなだれる。

なにこの展開。

確かに言いすぎてしまったことを謝りたい、という気持ちはあった。だからって、どうしてこの人はいきなり家まで訪ねてくるの？ ほんとこの人の行動は私の想像の斜め上をいくものばかり。

とはいえ、こうして忙しい中、忘れ物を届けに来てくれた相手を、無視するわけにもいかない。

私は、大きく深呼吸をしてから客間に向かった。一声かけて襖ふすまを開けると、柵さくの時と同じ出で立ちで背筋をびん、と伸ばし正座をしている支倉さんと目が合った。

「……花乃さん」

私を見るや否や目を見開いた支倉さんは、ちゃぶ台から少し横にずれて畳に手をつき、私に向かつて頭を下げた。

「え、支倉さん……？」

支倉さんのいきなりの行動に、私は面食らってしまう。

「先日は大変ご無礼いたしました。ご気分を害されたのであれば、心よりお詫びいたします。申し訳ありませんでした」

抱き締められた時のことをはつきり思い出してしまい、心拍数が上がる。それをなんとか落ち着かせて、私も畳に正座した。

買い物袋を脇に置いて、頭を下げる支倉さんを見つめる。

これまでのことから、少なからず支倉さんに対しては思うところがあつた。それなのに、こうして真摯しんしに頭を下げられると、なんとなく許すような気持ちが湧き上がってくる。

我ながらなんとチョロい女だろうと、自分がかっかりする。でもこの前のことがずっと引つか

かつてモヤモヤしていたのも事実だ。だったらこの機会を利用して謝ってしまえばいい。そうすればきつと気持ちもすっきりするはずだ。

私は一度深呼吸をしてから、支倉さんに向かって静かに口を開いた。

「支倉さん。頭を上げてください。……あの日は私も、つい勢いで失礼なことを言ってしまったので、謝りたいと思っていたんです。私の方こそ、酷いことを言っただけで申し訳ありませんでした。でも——」

支倉さんが頭を上げて、私をじっと見つめてくる。

「でも？」

「やっぱり、貴方と結婚はできません」

「……何故、とお聞きしても？」

「まだ知り合って間もないのに、いきなり妻にって言われても現実味がありません。それに、お寺の事情はよく分かりませんが、結婚するなら私みたいに何にも知らない女より、もっと支倉さんに相応しい教養を持った方のほうがいいのではないですか？ だから……」

「私に相応しい女性、か……」

私の話を黙って聞いていた支倉さんが、窓の外に視線を向けて呟いた。

「私の妻は、もう花乃さんしか考えられません。なので、貴女と結婚できないのであれば、私は生涯独身を貫くだけです」

至極真面目な顔をして、再び視線を戻した支倉さんが言った。

「え？ ちょっと、何言ってるんですか、そんな大袈裟な」

「大袈裟ではありません。それほど、私の中で貴女の存在は特別なのです。花乃さん、何度でも言います。私の妻になってください」

支倉さんの言葉に、私はポカんと口を開けたまま絶句した。

「どうしよう……私が言ったことが通じない……というか、私の主張と彼の主張が根本的に食い違っているような気がしてならないんだけど……」

そうなるほどどんなに私が今の気持ちを彼に伝えたところで、結局堂々巡りになっちゃうんじゃないかな……

すると支倉さんが、困惑する私から視線を逸らして苦笑した。

「ですが、出会ってすぐに求婚というのは、確かに性急すぎました。花乃さんが混乱し、私を信じられないのももっともかと思えます。その点は深く反省しております」

「……は？」

「そう、そうなんですよ！ 一瞬で心の中の霧が晴れたような気持ちになって、私はつい緩んだ顔で支倉さんを見る。」

そんな私を見て、支倉さんがニコツと微笑んだ。

「それでひとつ提案があるのですが……とりあえず私という人間を知っていただけませんか？」

「え……」

「つまり、結婚は考えずに、まずは私とお付き合いから始めてみるのはいかがでしょうか？」

「はっ!？」

ここへきて、また振り出しに戻った!

……でもちよつと待てよ。これまでみたいにいきなり「結婚してくれ」って言われただけ、状況は変化しているのかもしれない。

私は改めて、目の前にいる支倉という男性について考えてみる。

外見は高身長に、端正な顔立ち。物腰も柔らかく客観的に見ればとても印象のいい人だ。

しかし内面はやや強引で、人の話をあまり聞かないといった面もある。そこはかなり厄介だ。

だけど私に何度も拒絶されているというのに、こうやって新たな提案をしてまで関係を続けようとするのは、それだけ私への思いが強いということではないか。

正直なところ何故彼が私にそこまでの感情を持つているのかさっぱり分からない。

ただ、ちよつと気にはなってる。彼が私の何を見てこう言っているのか……

彼の提案について考えている間、支倉さんは黙って私の返事を待っていた。

私は伏せていた顔を上げると、心を決めて支倉さんと向かい合う。

「……本当に、結婚のことは考えなくてもいいんですか?」

そう確認すると、彼の綺麗な顔が優しげに綻んだ。

「はい」

「分かりました。では……お付き合いからで、お、お願いします」

おどおどしながら提案を承諾した私に、支倉さんは嬉しげに頬を緩ませ、満面の笑みを浮かべる。

「ありがとうございます。これで断られたらもう望みはないと思っていたので、安堵しました」

「そんな、大袈裟です」

「いえ、本当に。これ以上貴女に嫌われるのは辛かったので」

どこかリラックスした感じの支倉さんの笑顔に、つい見惚れてしまう。

スツと上がった眉に、高い鼻と切れ長の目。薄い唇に綺麗な歯並び……

この人、本当に綺麗な顔をしてるな。

そんなことを考えていたら、突然、今この家に二人きりだということを思い出す。その途端、妙に支倉さんを意識してしまい、胸がドキドキしてきた。

「花乃さん? どうかされましたか」

急に落ち着きがなくなった私を不思議に思ったのか、支倉さんがそう尋ねてくる。

「な、なんでもない、です……」

この胸のドキドキを悟られないよう、私は必死に平静を装った。その時、私の視線が買ってきたプリンの袋を捉える。

「あ……、あの、支倉さん。プリンは好きですか?」

「プリンですか」

「ええ。ここのプリン、凄く美味しいんです。久しぶりに食べたくなって、帰りに買って来たんですけど」

プリン……支倉さんも食べるかな……

私は、側に置いていたプリンの袋を膝の上にのせた。

「花乃さんは、プリンがお好きなんですか？」

「はい。プリンもですけど、寒天とか羊羹とか、くずきりとか。ツルツとした食感のものが好きなんです」

「そういえば、柵たなの時、お土産みやげにいただいた水羊羹みずじょうかんもとても美味おいしかったです」

支倉さんにはっこりと微笑ほほえんだ。そんな彼の笑顔を見ると、少し胸が切なくなる。

付き合うことになったものの、私はこれまで、随分支倉さんに冷たく当たっていた。それなのに、どうしてこの人は、こんな優しい顔で私に微笑みかけてくれるんだろう。

心が広いのか、よっぽど我慢強いのか……

そんなことを思いながら、支倉さんの顔を窺うかがう。

「……プリン、食べますか？」

私が尋ねると、支倉さんは綺麗な目を見開き、何故か驚いたような顔をした。

「よろしいのですか？」

「あつ、もしかして食べてはいけない、とか……」

「いえ。修行中は制限しますが、今はそういうことはないので大丈夫です。ぜひ、頂きたいです」

支倉さんは今まで見たことがないくらい、嬉しそうに笑った。

その笑顔に再び目を奪われてしまった私は、慌てて立ち上がる。

「じゃあ、ちょっと待っていてください」

私は急いでキッチンに向かうと、新しいお茶とおしぼりを用意して客間に戻った。そして、袋から出したプリンと一緒に、支倉さんの前に置く。

「どうぞ」

「頂きます」

支倉さんは、綺麗な所作でプリンを食べ始める。

「……確かに、滑なめらかで口当たりがいいですね。卵の味も濃くて……とても美味おいしいです」

そう言って、彼は優しく微笑ほほえんだ。

「よかったです。私もこの味が、凄く好きなんです」

私もプリンを一口食べる。そうしながら、私の意識はつい支倉さんの手元に行ってしまう。

やっぱり、綺麗な手……

そういえば、初めて会った柵たなの日も、この人の手に見惚みとれてたんだよね。あの手で髪を撫なでられたり、抱き締められたりしたのか……

そんなことを思い出してしまい、恥ずかしさに支倉さんを直視できなくなる。

俯うつむきがちに黙々とプリンを食べていたら、先にプリンを食べ終えた支倉さんが話しかけてきた。

「花乃さん」

「は、はい」

「お付き合いすることになりましたし、よかったら二人でどこか出かけませんか？」

改まってデートに誘われて、プリンを食べていた私の手が止まる。

「あの、もうですか？」

「はい。貴女に私のことを知っていたくには、早いほうがいいかと」

支倉さんは柔らかな口調で、きつぱりと言う。

——ど、どうしよ……。そりゃ、彼の言うことはもつともなんだけど、いきいなり二人で出かけて、一体何を話せばいいわけ……

なんてことをめまぐるしく考える私に、笑みを浮かべた支倉さんが提案する。

「そうですね、花乃さんのお休みの日に二、三時間くらい、お付き合いいただけませんか？ 美味しいあんみつを食べに行きましょう」

「……あんみつ」

思わずぼつと顔を上げて呟いた。目が合うと、につこりと微笑まれる。

あんみつか……。しばらく食べてないな。うう、私、あんこものにも弱いよね。しかも支倉さんのお薦めなんて凄く気になる……！

こんな簡単に食べ物に釣られるなんて、我ながら単純すぎないか？ という気がしないでもない。支倉さん、私の弱いところを見事に見事につけてきた感じ。

「わ、分かりました」

結局、欲求に負けてデートを承諾してしまった。

でも、嫌な感じはしなかった。

だってこれまでのような性急で強引な彼ではなく、あくまでも私のペースに合わせて、歩調を合

わせてくれたのが何となく分かったから。

私も拒絶ばっかりしてないで、ちゃんと向き合って彼のことを知ろう。そう思えたので、首を縦に振った。

「ありがとうございます、花乃さん、恐縮ですが連絡先を教えてください。そう思いますか？」

あ、そうだった。

さすがに家の固定電話に連絡では家族にもろバレなので、鞆かぼんからメモを出して電話番号とメールアドレスを書いて破り、支倉さんに渡した。

「支倉さんは、携帯電話をお持ちなんですか？」

私の質問に支倉さんはクスツと笑う。

「もちろんです。仕事の状況によつてはすぐにご連絡できない場合もありますので、返事をお待たせしてしまうこともあるかもしれませんが、必ずご連絡いたします」

そう言つて、支倉さんがスツと立ち上がった。

見送りのため一緒に玄関に向かった私は、そこでふと、まだハンカチのお礼を言っていないことを思い出す。

「あの、支倉さん。ハンカチ、わざわざ届けていただいて、ありがとうございます」

慌ててお礼を言つて頭を下げると、支倉さんの足が止まる。

「いえ……」

支倉さんは静かに振り返つて私の前に立った。そして、真っ直ぐに私の目を見つめてくる。



「あの日、丁度席を立つた貴女を見かけ、ここぞとばかりに待ち伏せして驚かせてしまいましたからね。きつと、その時に落とされたのでしよう。ハンカチに気づいて、すぐにお齋会場へ届けに行つたのですが、貴女はすでに帰られた後でした」

あの時のことを思い出すように話していた支倉さんは、ここで何故か一旦黙り込んだ。そして躊躇うみたいに目を伏せた後、再び口を開いた。

「本当は、その場でご家族にお渡しすればよかったです。ですが、私はこれを口実に、どうしてももう一度貴女にお会いしたかったのです」

「……支倉さ」

「私は本当に、心の底から貴女のことを好きなんです」

「……！」

これまでになく真剣な支倉さんの表情に、私は息を呑んだ。

「できることなら、目の前の貴女をこの手で抱き締めたい。ですが、それではこれまでと同じになつてしまうので、止めておきます」

そう言つて微笑むと、「では」と一礼して支倉さんは帰つて行つた。

私は支倉さんの姿が見えなくなると同時に、気が抜けて玄関にべたんと座り込んだ。

先ほどの告白がじわじわとボディブローのように効き始めている。

これまでも支倉さんに何度か告白はされたけど、どちらかと言うと驚きや困惑する気持ちのほうが大きかった。でも今日は彼の本気がストレートに伝わってきた。

どうしよう、胸のドキドキが止まらない……！

これで二人きりのデートなんて、私の心臓は大丈夫だろうか。

戸惑いと不安を抱きながら、来るべきその日を待った。

それから数日後。

午後の指定された時刻びつたり家のインターホンが鳴った。  
きたあ！

リビングでそわそわしていた私は、慌てぎみに玄関のドアを開ける。そこには、支倉さんがこやかに立っていた。

「こつ、こんにちは」

「こんにちは。では花乃さん、参りましょうか」

「はい……」

家の前に停まっていたのは、以前見たハイブリット車ではなく大きな国産の黒いSUV。

「前の車と違うんですね」

「あれは寺の車でしたので。これは私の車です」

どうぞ、と慣れた様子で助手席のドアを開き、私が乗るのを待っている支倉さん。

「ありがとうございます……」

「いいえ」

こんな風に女性扱いされたのは初めてだ……

支倉さんから連絡があったのは、昨日の夕方のこと。ちょうど仕事を終えて家に帰ってきたところだったので、動揺のあまり思わずスマホを落としそうになってしまった。

休みの予定を聞かれたので答えたら、その日は支倉さんは夕方から仕事が入っているという。忙しいならまた別の機会でもいいですよと言ってみると、仕事までの時間で申し訳ないが、ぜひ行きましょうと彼に押しきられて、今日のデートが実現した。

夕方から仕事のある支倉さんは、今日も法衣姿だ。

「せっかくの初デートなのに、ゆっくりできなくて申し訳ありません」

いきなり謝られてしまい、私は苦笑する。

「いえ、お気になさらないでください。で、これからどこに行くんですか？」

「私の地元がここから車で三十分くらいなのですが、実家がお世話になっている老舗しよせの和菓子店があります。その甘味が美味おいしいですよ」

支倉さんは車を静かに発進させると、前を向いたままにこやかにそう言った。

男の人が甘いものを食べるイメージってあんまり無かったけど……

「支倉さんは、甘いものをよく食べるんですか？」

私がそう尋ねると、支倉さんは、はは、と笑い声を上げた。

「食べますよ。生クリームたっぷりみたいなの洋菓子はあまり食べませんが、寒天かんてんとか葛餅くずもちは小さい頃からよく食べていたので、好きですね」

ふうん、そうなんだ。支倉さんの小さい頃か……

「支倉さんは子供の頃から今の仕事に就こうと考えていたんですか？」

「そうですね。お寺の子供でしたから、自然とそういった流れに乗ってましたね。高校は仏教系の学校でしたし」

「そうなんですね」

すっごい落ち着いているし、さぞかししっかりした子供だったんだろな。

そんなことを思いながら助手席のシートに凭たれる。

「やっとなんか私を聞いてくださいましたね。少しは興味を持っていただけましたか？」

運転席の支倉さんが私にちらりと視線を送る。

「……興味というか。私、支倉さんのことも知らないのよ」

そんな状態で結婚を迫られたり、お付き合いすることになったりしたんだよね。

「何ということはない、ただの坊主ですよ」

微笑みながらこんなふうに支倉さんは言うけれど、絶対ただの坊主じゃないよ……！　こんなグイグイ結婚迫ってきた男の人、初めてだし。

「それじゃ支倉さんのこと、何にも分からないじゃないですか」

「そうですね。失礼致しました。でも花乃さんには、わりと本来の自分を見せていますよ」

「そうなんですか……？」

私はやや訝あやしげに支倉さんを見る。